

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と

可能性を考える



【活動の基本情報】

参加学生数:4 名

(2 年生:2 名、3 年生:1 名、4 年生:1 名)

活動期間:2023 年 6 月～2025 年 1 月

担当教員:八島雄士

1. 活動実施の経緯

那智勝浦町色川地区は、40 年以上前から移住者受入を地域主体で行ってきた中山間の集落である。「らくだ舎」(受入役の千葉さんが経営者)が、9つの区からなる色川地区のハブ(ヒトやモノが集まり、交流が生まれる場所)となっており、「棚田守ろう会」などの活動推進にも寄与している。地域づくりにおけるハブの役割と可能性を考えることを目的に、参加学生が LPP の活動を実施した。

2. 活動の内容

実際の活動は、地域の雰囲気を感じ、参加者がそれぞれに問いを立て、主体的に行動する方針で実施した。

具体的には、立地(和歌山大学から片道 200km)に配慮して、オンラインで勉強会や打ち合わせを実施したのち、現地のキックオフとして地域の寄合に参加した。現地施設や棚田などの見学、色川の「おまぜ」(伝統料理)などを食事しながらの会食に教員を含めて参加した。寄合には小阪区以外の他の区の方も参加され、住民の方々と意見交換を行ったが、参加学生と住民が知り合い、地域に受け入れていただける良い機会となった。

次に、学生だけの活動として、「環境共生の会」という寄合に参加し、発表や意見交換する活動を行った。この会は、もともと環境に配慮した生活はされているなかで、より環境負荷の少ない暮らしを実現するための取り組みを考えることが目的となっている。実際に参加した学生は、電動自転車を用いることによる自動車を使わない移動、庭へのソーラーパネルの設置、小水力発電への取り組みなどを知ることができ、さまざまな観点から環境配慮ができることを学ぶ機会となった。

3. 活動を通じて

LPP の活動を通じて、参加学生は、色川の住民がより魅力的な地域にしようと積極的に活動していることからさまざまな学びがあった。1つ目に、新しいことにチャレンジするエネルギーを感じることができた。2つ目に、多様な知識や経験を持つ移住者が多いことが色川の強みだと気づくことができた。3つ目に、一つの方向性で進んでいく困難がある反面、リーダーシップが活力を生み出すきっかけとなっている現実を知ることができた。

この2年間の活動のなかで、1年目は全国棚田サミットを色川の棚田を舞台に実施する手伝いをしたことで、色川地区への外からの視点を学んだ。2年目は、寄合や会合に参加することによって色川地区の内の視点を学んだ。これらの活動を通じて、「らくだ舎」に集うことのみならず、集う人々そのものが「地域のハブ」となっていることがわかった。参加学生は、自覚と誇りを持って活動されている色川住民の方々との交流を通じて、単純な活動のお手伝い以上の深い学びが得られた。

4. 成果ポスター

和歌山大学観光学部 地域連携プログラム（LPP）2024

那智勝浦町色川地区



中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と可能性を考える



和歌山大学



那智勝浦町

色川地区について

那智勝浦町色川地区は、那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほど走った所に位置する、9つの区から成る、人口が300人ほどの小さな地域です。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出していききました。しかし、同時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分以上を移住者が占めるまでにになりました。地域資源としては、美しい棚田や茶畑が有名です。特に「小阪の棚田」は、一度休耕田となった棚田を移住者を含む地域住民が主体となり再興させ、現在も関係人口の方々などを交えた保全活動が定期的に行なわれています。



活動報告

地域の寄合に参加

7月13日、14日の2日間今年度初の訪問で2日間滞在しました。1日目は悪天候の中、棚田を始めとする地域の施設を見学し、2日目には地域の寄合にも参加しました。「おまぜ」と呼ばれる色川で昔から作られている料理をはじめ、準備から片付けまで住民の方と行うことで地域に関する様々なことについて聞くことができ、貴重な経験となりました。



「環境共生の会」とは

色川では「環境共生の会」という集まりがあります。環境問題について深く考え、色川で環境負荷の少ない暮らしを実現させようと、「環境共生の会」では様々な取り組みが行われています。私たちは実際の寄り合いの場に参加させて頂くことが出来ました。

【取り組みの例】

- ・ 自動車を使わない移動の実現(電動自転車を用いる)
- ・ 庭にソーラーパネルを設置する
- ・ 小水力発電所を作る(まだ実現途中) etc...




実際に参加してみても

色川では住民の方々がより魅力的な地域にしようと積極的に活動しており、新しいことにチャレンジするエネルギーを感じました。地域内に多様な知識や経験を持つ移住者が多いことも色川の強みだと感じました。一方で様々な考え方が存在する中で、一つにまとまり進んでいくことの難しさとリーダーシップの重要性を実感しました。




今年度の活動を経て

昨年度は、「色川」を「外」の視点から学ぶことが出来ました。「全国棚田サミット」が那智勝浦町で開催され、地域の方たちと一緒に運営に携わらせて頂きました。1年を通して、中山間地域とは、色川とはどういう地域なのか、深く知ることが出来たと思います。今年度は昨年度に比べ、より「色川」を「内」の視点から学ぶことが出来ました。「環境共生の会」という地域の寄り合いに参加させて頂き、色川で暮らす人々がいかに色川をどのような地域にしていきたいのか、「色川の未来」について考え行動していることが分かりました。

この2年間の活動を通して、色川における中山間地域の【HUB】とは、【色川について考え、その思いを共有することが出来る寄り合いの場】ではないかと考えました。自身が今暮らしている地域について思いを馳せ、それを共有し合い実行できる場があることで、「色川」の住民であることに自覚と誇りを持つことができ、「色川」で暮らす人々の心を繋ぐことが出来ているのではないのでしょうか。色川での活動を通して、ここでしか出来ない学び、発見を得ることが出来た貴重な2年間になったと思います。

4. 2024 年度合同活動報告会の実施

2) 発表の実施報告

本会では、各報告時間に2プログラムずつ、別のエリアで発表を行った。当日の振り返りと報告のため、後日、各プログラムの発表の様子や、アンケートフォームで回収したご意見・ご質問に対する回答をまとめた報告書を参加学生が作成した。

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

テーマ：中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える

●報告について

私たちの LPP では、昨年度に引き続き、【中山間地域における地域 HUB の役割と可能性について】というテーマで活動を行った。昨年度は、全国棚田サミットの開催地となり、そのイベントを中心とした活動を行った。今年度はより地域の内部に密着し、【環境共生の会】という、地域の人達の寄り合いの場に参加させて頂くこととなった。そこでは、色川で暮らす人々が【色川の未来】について考え、行動していることが分かり、様々な学びを得ることが出来た。この 2 年間を通し、色川における中山間地域の【HUB】とは、【色川について考え、その思いを共有することが出来る寄り合いの場】ではないかという、テーマの答えを自分たちなりに導き出すことが出来た。昨年度と今年度から得た学びを、報告できちんとお伝えすることが出来たと考えている。また、私たちの報告を拝見し、1 回生の方が興味を持って頂き、報告会の後の交流会にて声をかけていただけた。単なる活動報告ではなく、色川という地域に興味を持っていただくきっかけとなる良い機会になったと考えている。今年度でテーマの区切りがつくので、報告会で得た発見を参考にしつつ、来年度の活動に活かしていきたいと考えている。

●質疑応答

Q. 学生が寄り合いに参加したことで、地域にとってどういった効果があるのか。

A. 私たち学生が寄り合いに参加したことで、話し合いがより円滑に進んだと考えられる。参加した【地域共生の会】の寄り合いでは、プロのファシリテーターの方をお招きし、グループワークの形を取っていくつかのテーマについて意見交換を行っていた。学生は、各グループの書記として、グループ内で出た意見を全体に共有するという役割を担った。地域の方は、学生が客観的に分かりやすく意見をまとめてくれたことで、話し合いが円滑に進んだ、また頼みたい、と言ってくださっていた。また、学生としても、地域特有の限られたコミュニティ内での話し合いの難しさ、新しいことを実行するこの厳しさを学ぶことが出来た。これらは実際の寄り合いの場に参加してみないと分からないことであり、そのような場に参加する機会は貴重なため、来年度も機会があれば参加したいと考えている。

Q. 過去に那智勝浦町色川 LPP に参加していた先輩で、色川の方と地ビールを作ったという話があったが、現在はその地ビールはどのようなになっているのか。

A.地ビールを作ったという OB の先輩とは 1 度お会いしたことがあるが、現在その作られた地ビールが色川でどのように扱われているのかは情報を得ることが出来ないの
で、確認したい。